りびんぐらいぶず　令和3（2021）年8月第2号

安楽浄刹に生まれんとおもへ

◆ご讃題

「欲往生」といふは、安楽浄刹に生まれんとおもへとなり。「皆悉到彼国（かいしつとうひこく）」といふは、御（おん）ちかひのみなを信じて生まれんとおもふ人は、みなもれずかの浄土に到ると申す御ことなり。

（Ref『尊号真像銘文』第二条、註釈版 P645）

◆はじめに

お通夜の入棺文の「破地獄の御文」は、浄土真宗では、地獄におちることがないようにという次元を超えて、『往覲偈（おうごんげ）』に、阿弥陀様のお浄土にお参りしお救いに与る御文として説かれています。

「其仏本願力　聞名欲往生　皆悉到彼国　自致不退転」とは、**「その仏(阿弥陀仏)の本願力によって、名を聞きて往生せんと欲へば、皆悉く彼の国に到りて、自ずから不退転に致らん」**とあるとあるのがそれです。

阿弥陀様から愚かな衆生一人一人に回向された本願力によって、衆生が例外なくお浄土にお参りさせて戴き、おさとりの身とさせて戴くというのであります。

そうすると、肉親とのお別れに臨んでその本質を頂戴し直すことが大切になります。

一歩進めれば肉親との別れを通して親族の一人一人もまた如来様の本願力におまかせすること一つでお救いに与るからです。

してみれば**『仏説無量寿経』**下巻に示された**『往覲偈』**の御文は、肉親とのお別れを機縁とした衆生が賜るお聴聞のきっかけであると頂戴することができます。

◆**『往覲偈』**の御文については、親鸞聖人ご自身が**『尊号真像銘文』**の中に御自釈を施していらっしゃいます。すなはち、

「欲往生」といふは、安楽浄刹に生まれんとおもへとなり。「皆悉到彼国」といふは、御（おん）ちかひのみなを信じて生まれんとおもふ人は、みなもれずかの浄土に到ると申す御ことなり(註釈版聖典 p645)、がそれであります。

聞名欲往生の**「欲往生」**は、第十八願に示された「欲生我国」です。実は、第十八願には、至心(如来様の真のお心)。信楽（如来様のお仰せにおまかせする）と「欲生我国の三つの信心が説かれており、教行信証にもその中心となる「信楽」が詳しくお説き下さっているところであります。

私達はあんまり問題に気付いて居ませんけれども、如来様の仰せの通りにお聞かせに与

る［疑蓋無雑］は、信心を頂戴する「相（すがた）」でお説き下さっているのであり、うっかりするとその本質に目が開かれないまま終わってしまいかねません。

◆三業惑乱という大事件の発端で能化功存が最初に気付かれたのがこの点でありました。それはどういうことかと申しますと当時、福井の御門徒様方の間に、「私達の救い」は阿弥陀様がおさとりを開かれた十劫正覚の昔に定まっているから、衆生は、何一つ案ずることなく、昼寝をしておれば足りるとする「昼寝安心」という異安心が広まったからです。

能化功存は、その課題にお気づきになり、寧ろ、衆生にとって大切なのは，自分自身の救いについて、「お浄土に参らせて戴きたいと」自ら欲（おも）う事だと仰ったのです。

考えてみますと、親鸞聖人の尊号眞象銘文の御言葉は、そのことに関わるものですから、じっくりと学問的見直しが期待されるところでありますが、私達布教使は、御門徒様と共有するお聴聞の現場でそのことを体験的に味わわせて戴きたいと思われるのであります。

◆水馬（ミズスマシ）

前門様のご著書『朝（あした）には紅顔ありて』角川書店刊）に村上志染先生の「水馬（ミズスマシ）という詩を引用された一文があります(RefP31)。

方一尺の天地
水馬しきりに円を描ける
なんじ　いずこより来たり
いずこへ旅せんとするや？
へい？　忙しおましてな！

「方一尺の天地、実に小さな水たまりです。

真夏の暑い日、夕立なんかが降りますと、底に水たまりができて、ミズスマシが水面をひょいひょいと走り回っているところを目にすることがあります。

「方一尺の天地」、「天地」ですから縦横三十センチほどの小さな水たまりが、ミズスマシにとっての全世界になりますね。

「方一尺の天地　水馬しきりに円を描ける」。その小さな水たまりの水面を、くるくる円を描いて走り回っている。

その走り回っているミズスマシに声を掛ける。「なんじ　いずこより来たり　いずこへ旅せんとするや？」おまえさんいったいどこからきてどこへ行こうとしているんだいと聞いたら、

ミズスマシは「へい？　忙しおましてな！」、忙しゅうて忙しゅうてそんなこと考えている暇がありますかいな、余計なこと考えて立ち止まってたら、世の中に置いていかれます。という返答です。

これもまさに私たちの姿、自分の都合の展開を追い求めているけれど、本当の幸せとはどういうものかという真実の問いを見失った生きざまになって参りますね。

そうするとそういう考え方のどこかを突き破って行くきっかけ、「水馬」のようになかなか自分の生き先を考えてみる余裕のない私たちにズバっと、切り込んでいく。聞く者の腑に落ちる。そうしたきっかけを引き出す手立てこそが布教使にとって大切になります。

なぜ如来様が本願を起こされたのか。

なぜ如来様が願いを起こされねばならなかったのか。本願とは何かということを聞かせて戴くのです。ここで経典に「衆生」と呼び掛けられるときは「私」と読み替えて聞くようにします。

阿弥陀如来がご本願を起こされた謂われを聞いて、私を救うためであったと戴く。それは、私がお願いした訳ではないけれども、この危うい「私」を見て、放ってはおけない。救わずには居れないというのが阿弥陀さまの本願だったと頂戴する。この視点から布教使もお聴聞の皆様と共にお聴聞し体験的に頂戴するのだと押さえることが大切だということになるのであります。合掌。

◆正覚寺仏壮お聴聞の会　八月八日(日)二十時より
◆正覚寺歓喜会（かんぎえ）　八月二十一日(土)午前十時より
◆その成果を公開したHPは、「正覚寺　北小松」で検索し、ヒットする「FC2」からお入り戴けます。

著作編集兼発行元（本願寺派 正覚寺内）〒520-0501 大津市北小松四五二番地
TEL077-596-0166、FAX077-596-0196 住職 堅田 玄宥